

文学館だより

平成29年 3月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 68 - 9511
文 責 日 高

めづらしく白雪降るとかしこみて部屋にこもれば匂ふ沈丁花

「朝の歌」収録

歌の意味

珍しく雪が降ってきたので、気持ちを新たに部屋にこもって仕事をしていた。ふと気づけば沈丁花の芳しい匂いがそっと漂っていた。

歌の背景

大正5年、北下浦の春を詠んだ歌。静かに降る雪とかすかに香る沈丁花。まことに静かな情景を描いた牧水らしい歌である。喜志子療養のため移り住んだ北下浦の、穏やかな一日を想像することができる。

吉川宏志さん 凱旋

2月7日(火)~9日(木)

今駅に着いたところ、と母に言う市外局番今日は押さずに

『青蟬』

ひらがなのまだ読めぬころわが前をひくく過ぎしかひえつき節は

『夜光』

われはひとつづきのときを生きながら幼き日より山の影さす

『夜光』

吉川 宏志氏 宮崎を詠みしうた (抜粋)



吉川 宏志氏

歌人、吉川宏志さんが、第21回若山牧水賞授賞式ならびに関連行事のため帰郷されました。

牧水賞が始まって21回目(24人目)にして、初の県内出身者(しかも越表出身)による受賞とあって、関係者一同喜びに満ち溢れました。文学館も心ばかりのお迎えをと思い、『吉川さん お帰りなさい』のパネルを掲げ、お越しをお待ちしました。同行された歌人の大口玲子さんが、誰よりも早くパネルに気づいてくださいました。「このことばは吉川さんにしか使えないことばよ!」と言って、みなさんで喜んでいただきました。

青竹と柳もちは、三浦正教さん(赤井笠)からいただきました。田舎ならではのおもてなしに花を添えてくださいました。正教さん、ありがとうございました。

授賞式

2月7日(火) 宮崎観光ホテルにて



「宮崎は日本一の短歌県である」と、主催者河野県知事は宣言



「今回の牧水賞は吉川さんの『鳥の見しもの』以外にはない」と、選考委員の伊藤一彦先生は吉川さんを大絶賛

祝賀会



鏡開きに始まり数々のスピーチが続く中、私が一番心打たれたのが大宮高校時代の恩師、志垣澄幸氏のスピーチだった。受賞が決まってお祝いの電話をしようと思っていたところ、吉川さん本人から電話がかかってきたそう。 「吉川君 = 読書感想文」という位、表現力、構成力ともに優れており、衝撃を受けたと当時を話してくださった。30年経っても今なお互いに信頼し合い強い絆で結ばれているお二人に感動した。(写真 左志垣氏 右吉川氏)

文学館来訪

2月8日（水）、9日（木）



8日、延岡市の高校訪問を終え、記念講演会までの合間を縫って、文学館に来てくださった。熱心に牧水歌集に見入る姿がとても印象的だった。牧水の偉業を讃えるとともに、自分のこれからの歌人としての姿を重ねているかのように映った。

その後、牧水庵にて昼食。牧水そば、しし汁、鮎の塩焼き、やまめの塩焼きをご堪能いただいた。



右は翌9日、ご両親そろってお越しいただいた時のもの。

わずかな時間だったにもかかわらず、ゆったりと時が流れたように感じた。穏やかな温かい空気に包まれたひとときだった。



越表地区歓迎会

2月9日（木） 旧越表分校跡地にて



こいのぼりを揚げた思い出
何人に（宏志を）抱いてもらったかわからない
地域に育ててもらった
忘れられない
帰りたくなる
ふるさと 越表

吉川さんの父、義信氏（昭和43年～45年越表分校勤務）あいさつより



自分の感性、ことばの感性はふるさとの風景に磨かれたと断言する吉川さん。

おもひやるかのうす青き峡のおくにわれのうまれし朝のさびしさ

牧水の歌の中で好きな一首だそうです。自分が見たものを牧水も見ていたのだなと共感されています。今回の帰郷は一味違う意義深いものになったのではないのでしょうか。

十分なおもてなしができたかどうかわかりませんが、文学館も心をこめてお出迎えさせていただきました。早速、吉川さんからお礼の手紙とともに歌集が届きました。現在、ギャラリーにて展示していますので、どうぞ、手に取ってご覧ください。

自選5首直筆原稿、直筆短冊等々合わせて展示しています。

